特42
986

宮本無三四二刀傳

下卷

言野事思寞紙少毒虫録

東陽堂叢兄

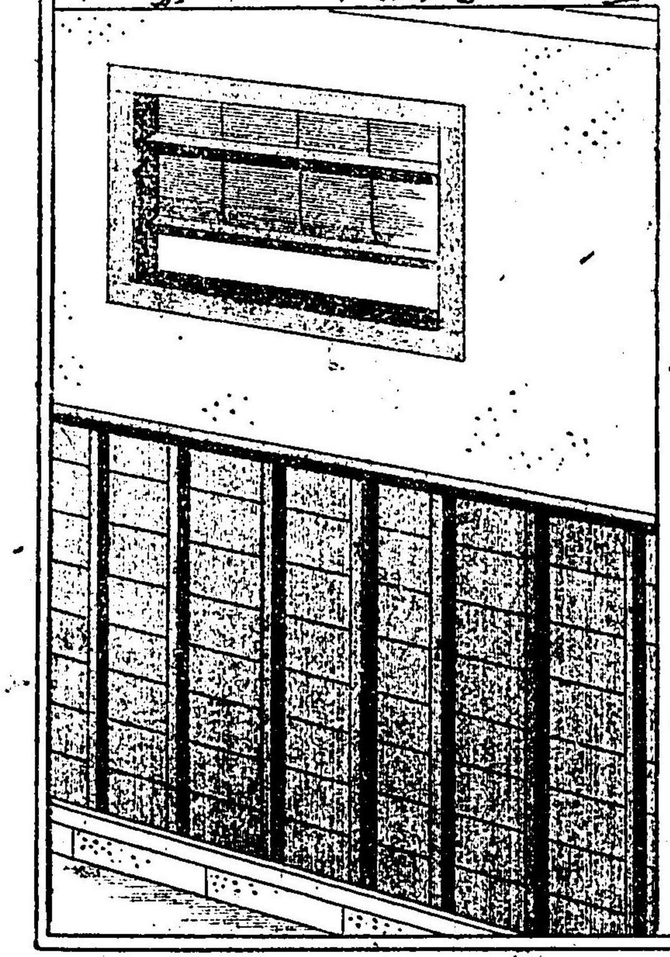
東京　春風亭香雨編

徳で宮本友次郎ハ實父の仇を復んとを養父武右衛門ゟ計らへハ尤の事なり一日も捨置べき
ゟ非ず急き准備をなる宜けれ先此事を主君へ願ひ免許を乞ハゝ成り難きを其書面を加藤
主計頭清正主に持ハ急ぎ宮本父子を召出され清正二個ゟいろ〳〵やう友次郎を以て實父の
仇討させんとの〳〵神妙と申さゞら一旦他家を相續をる者實家の為ゟ仇を復さんと其例なる
を聞き然れハ仇討とせゞして武者修行を出願ゟハ穏當ゟちんと情深き主君の言葉ゟ宮本父子
感涙ゟ袖を絞り仰の如く願面を認直り滞りゟく聞届とあり〳〵ハ友次郎が喜び大方ゟらぎやが
て養父母義弟友の助ゟも別を告げ立出んとをるを傳へ聞き武右衛門が門弟ども友次郎が馬の
はなむけせんとて幾人ゟ城下外れまで見送りける友次郎ハ今年二十才の上をまゞ越さぎと雖武術の
練磨ゟ長たるハ實父吉岡ゟも劣らざる蓋世の英傑ゟして且文學ゟも長ぜ〳〵ハ世人の評ゟ高かり
る然るゟ此度ハ思ふ仔細のたらハせ友次郎を改め更ゟ無三四と号けつゝ日ゟらぎ筑前の国名島ゟ

至り亡父母の墳墓ふ詣で佛事を營み夫より吉岡が高弟等を尋ね厚く積日の厚意を礼謝仇敵の手掛りを彼是と尋ぬるふ固より確うふる証據とてもならざれば先年播州姫路ふ於て佐々木嵜流といへる者と爭鬪ふ及だれし時彼者吉岡の為ふ恥辱を蒙りしが其後姫路を逐電せしとふ風説あり此者の外吉岡ふ於て人ふ怨みを結ばるし程の事なりしを聞ざれば大方ハ其嵜流が闇討ふせしふらんと門人等が語る処據ふきふならを然らば當地を発足し中国ふ渡り夫より上方の国々を巡りて仇敵の手掛りを需めんと憧四五日の逗留ふて名島の城下を発足して道そがら有名の剣術者ありるを聞けば尋て試合をふまとい(ども何れも宮本が手ふ足る者とてハならざりしが兎角して備前の国岡山の城下ふ至りしが當城主ハ浮田備前守秀家卿の事ふあれば殊更ふ武藝を磨うせ玉ふ其中ふも剣道の師範家ふ白倉源五左衛門と呼べる者ありし吉備の宮の神の夢想の神傳を感ずたりと稱して一流を起し吉備神道流と名付け一国の上ふ冠たり之ふ依てその名隣国ふ轟き主人の覚ふも他ふ異ふありしうべ狠ふ驕慢ふして人を見ること活たる屍とも思ひ夫が為ふ諸士何とふく渠を憎まざるいふかりしが然るふ無三四ハ城下の繁花ふして其処此処とうち

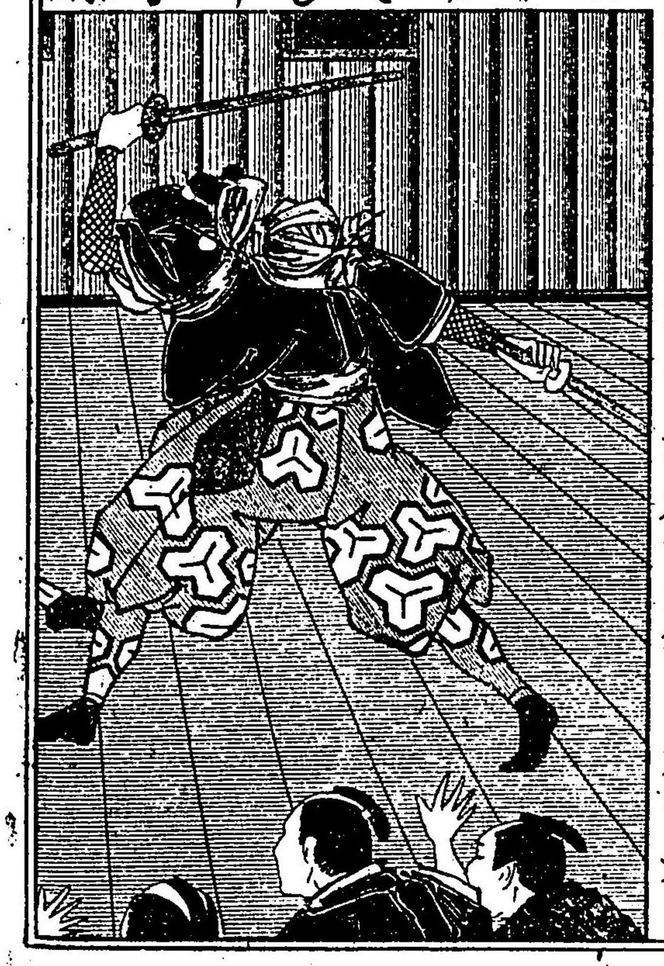
めぐりつゝ白倉が門前ふ至りしふ正面ふ玄関ありし教場ハ門長屋ふありし住還よりハ壕一重の裏ありし壮士等のさけぶこゑハ門前ふ聞えしが無三四ハ稽古のやうをを窺んと教場の辺ふ行き壁の壊れより自を斜ふして詠め居たるふ折ふ一個の壮士内より出来り無三四を見付け汝何者ふあれば叫ふ我々が稽古場を伺ふや以の外の不届なりと咎むるふ無三四ハ急ふ腰を屈め某ハ旅人ふして土地不案内の事ふて訪らぬ過つて御門内ふ入りし固より武藝ハ好める道ふれば拝見をもふしたと存ず不礼を仕りぬ何卒御宥免あらまほしと託れども壮士ハ承知せず此方ふ来よと無三四が手を取りひき寄る此時教場ふ居合せし壮士とも我先ふと找ち出で人の屋敷(案内せぬ忍ぶ者ハ盗賊なり夫殺せと叫ぶふ教場の内より高声ふ各鹿忽ちさるふと左右を剣し年齢四十人余の男出来れり無三四其人物を見るふ身丈六尺余面の貌圓く巨眼ふ頬腮の辺ふ髭再生たり且双髪ふして其模様尋常の男ふならず此時無三四ふ向ひ某ハ當教場を預る師役白倉源五左衛門と云ふ者なり貴殿ハ何れの国の旅客なりや無三四答て某ハ仕官の者ふならず諸国偏歴の武者修行なり姓名ハ后ふ申さん某鎮西より中国ふ至る道そがら足下の武名甚高し依て當国ふ来りしハ

第一貴殿ゑ随逐致し我及ばざる所を教授を願ひん所存あり去ながら拙者とても一流の印可を得たる者ゑれば足下ゑ及ばざれば謹で師と仕ふべし拙者未熟あれども足下ゑ勝る事あらんゑ師として仕まつり難し願くは我ゑ御立會下さらば意外の歓ありと恐る色なく述ける白倉ゑ奸曲の性ゑして無三四を他国の聞者と見て誘ひ落して虜とせん主君の覚えを愛たくせんを分別胸ゑ浮めるが案ゑ相違の無三四が辞師弟互ゑ顔を見合せ且辞もあらしが素より大膽なる白倉ゑれば此青年奴高の知たる武藝を以て何程の事ったゑん木刀を以て手足を打据目ゑ物見せんと思ふゆゑ拒て怒を顕さず却ゑ修行の方ゑるよゑそれと存ぜず門人等が無礼を許し



玉(我速ゑ手を交べけれども主君の命を蒙り一国の師範をる身として軽ゑ初より立合申さんも主君の聞えもれば先我高弟より試合玉と云つ既ゑ道場誘ひ白倉が高弟福田十左衛門村山源右衛門福島善衛門浮田源兵衛猪子内匠貝澤万左衛門を始め都合十八個の高弟共何あく打負くが白倉の番ゑ的ゑ無三四が手練非凡あるゑ暫時い時を移をとゝへども今更門人の手前もれば澁りながら坐を立て囲の中ゑ入りいざ一剣を試んと立合ゑ及び無三四白倉ゑ向ひ我負る時は門下ゑ入り教を仰ぐべし万一打勝にて必ず怒を生じ主ゑと勿れ白倉の曰く大丈夫ゑらで少事ゑ憤を発をべきや勝も負るも自己の修行次第ありと互ゑ辞を誓ひ立合が白倉

何ぞ無三四ふ及ぶべき忽二刀を以てまろ立られ立會負とあり〻ば無三四ゞ手を上坐ふ直〻さてもや驚き入たる御手の中ゝふ某三十年来武藝を励み既ふ今年まで貴殿の如き人物に合〻とおく吾今日より驕慢角を折足下の門下とあつて其温奥を叩て傳へ玉り〻ば洪恩の程忘るまじと種々託入て其日より無三四を我舎ふ止め二刀の太刀筋を尺管稽古ふ及び〻ゞ光陰い矢よりも疾く昨日今日と思ふまふ百日餘の逗留ふあり〻ば宮本ば或日白倉に復讐の志ある旨を語り明日より発足せんことを告〻ば白倉の云るやうさる事のあるを知ねば是まで止めまゐらせしも心ふき業ふ待れど明日ハ日柄も宜〻かねばとて両三日まけて止めおき其夜ひそふ門弟等を呼集め私語やう我



無三四を止めハ彼ゞ二刀の奥義を残らず自得せゞ為ふ〻ゞ既ふ其事ハ稍果せり明後日ハ〻ば彼この地を発足せんと〻り然るふ其侭放ちもるまおいてハ當国の武威ハ是々ふ〻と他ふ出て誹謗をるときハ容易ふらざる禍を生ず〻返もくも生て放ちせるものあらばと殺して禍の根を截んと欲をと〻るよ門弟等も固より宜〻由者共あれば一も二もなく同意して遂ふ凡呂場ふ於て沸湯を以て殺せべきの評義を決し其准備ふ及ひける実ふ残酷なる者共あれば必天の罰を被り反て無三四ゞ為ふ殺さる又心地よきとふらざるせ叔白倉ハ謀畧十分ふあれりと凡呂責ふ及び〻ゞ無三四ゞ精心神佛の擁護ふせ依り彼凡呂をも打破り白倉ゞ一族門弟ふ至るまで手逆ふものハ悉

打殺し辛して岡山の城下を通れいで夫より作州伯州を巡りし時に或に山賊を殺し良民を救ひ天狗と試合をす是に勝ち夫より諸国を経巡りて遂に信濃路に赴きしが頃に中冬にして日の短きに夕陽西に傾しかば旅舎をあして休息せんと頻に道を急げども里遠る方に出もやらねば詮方尽て小高き丘に登り四方をきつと見渡すに人煙遥に登て一の茅屋あり無三四打悦び今宵に彼処にて明さべしと急ぎ茅屋に至り窺ふに内に六十余の翁炉火を焚て居たりしかば慇懃に礼をなし一夜の宿を乞れば老人も快く承引て我独身のことなれば飯とまをらせること煩し米に澤山にあれば自ら炊で喰べらるべしと質朴なる老人が辞に無三四に谷水に足をそゝぎ

やがて食事を仕果て炉辺に一夜を明せしが其朝に大雪降積り無三四も甚だ當惑せしを老人の云るやう此雪にて今両三日に迄も旅行あり難し心長閑に逗留なれこそ夫より四方の物語に及び無三四ふと壁に木刀の二本掛てあるを見出し老人に云るやう昨夜より伺ひまるらもるに老人の御容貌尋常あらを且木刀のあるを見れば武術鍛錬の御方とこそ存ぜれ某に肥後熊本の産にて幼時より剣術をこのみ三ケ年以前より武術修行の為本国を出しかども未然るべき師を得ぜ何卒自得し玉ふ所の妙技もがらば奥義を叩て教へ玉へと恭き事に侍ると聞て老人打笑ひ我事に當国の旧家にて笠原新三郎頼種と云ふ者あり我も十一歳の時より武術を好こと既に十一流の印可を得たりしが那自得せし所の

りと聞き無三四に試合を望こられば然れば先試みに一度立會べしと戸外の雪五六間計を掻拂ひ比量場と
あり新三郎も立上り木刀を二竹肋にかゝり無三四に渡し足下に両刀を得とりとき〳〵先是を持べし我に
木刀あれば是を持べしと鍋蓋を操りやゞて戸前に出堅庭に立上れば無三四木刀を提げ直に新三郎に打
てかゝるを新三郎見もまし鍋蓋を以て手許に付入り水もたまらぬ彼蓋にて木刀を地に押て動さぬ無三四
是より精神を励し凡五六度の比量一
度も勝を取る事能はず其侭木刀を
捨て雪の上に臥し寔に奇妙の剣手練
迚も人力の及ぶ所にあらず長く先生の門
下に在て仕まつらんと是より新三郎が
と共に数月止り自得の奥義を学び傳へ
古郷を出早四年にもありぬれば何とな
く懐き心地あれば今一応九州の地に

献を探り見ばやと新三郎に厚く謝言
を述て只管西に向ひて急ぎける。偖
り程に宮本無三四は道もがら尚敵を
探り鬼角して播磨国室の泊より豊前
小倉に赴る船に便を見めやゞて追手
の順風穏にして七月廿日小倉の辺に著
船し乗合の人々に思ひ〳〵に差方別れゆ
くに年の頃五十有余の農民とおぼしき
男四十余の女を誘ひ無三四が後より来りお侍さま何れに赴き玉ふぞ某に船中にて申せし如く熊本に両
親あり父母の安否を問人為に成るあり各〳〵何れに成り玉ふぞ私共は筑前名島の近在の農夫にて此度讃
岐の金毘羅に参詣し其序に都に登り神社佛閣を拝廻りは然に宜き道連あり某も名島に立寄んと思ひ
伴に参るべしと倶に道を急ぎしが頃は七月にて其暑さ堪え難なれば樹木生茂し大池の汀に至り爰にて

むー休息せんと農夫は根笹をおー伏て尻居おどっと坐もる所お忽滅利々々と物碎る音尻の下お響たり農夫周章旦を見れば一の食箪を網嚢お入たる侭お押潰せり這いうおもちふまもあく樹本茂るー池の端より侍七八人顕れ出何者あれ我々共ゞ食箪を踏碎ーを目お物見せんと既お農夫を取囲こ敲きもるん勢お農夫の妻も打驚き倶お急忽を託入ゞも更お聞入る景京色おれば無三四は中お別入て侍共をあごむるを反て無三四お過言をあー既お刃傷おも至らんとせる時彼方の木蔭より一個の侍出来り双方共お我言すーを聞いと種々和睦を扱ひーゞ武三四は固より農夫七助妻諸共お打喜び尚又七助は彼扱ひー武士お礼を述んを近ー我と顔をあげて彼侍を見る時いっぐおーたりけん哈と云て地お倒れ俄お氣絶なーるお咸驚て介抱おもお須臾にして

我お帰れば妻も無三四も喜びつ且又小倉の藩士等も倶ま稲生めでたーと云て皈りる今七助が氣絶せーは深き子細のあるまれども知る者とていふうりゝ恁て七助は固より老實の者ふれば無三四を命の親と崇め是非共我家に伴ひ行礼を述んと道ぐら夫婦談合調て今日小倉島お至るの日別れんとする宮本を夫婦の者も是非共ゞと我家に伴ひ来り　お最又奇なる語りゝ此七助が娘お養と呼者なり身習の為おて名島の家中宮本武右衛門の宅に巡々て奉公せーゞ同家若党幸助とゝつの程お契り初巻は只ゝ一ぬ身とまりーゞ武右衛門の妻は情厚き女なれば二個の者に聊の金乎を恵と主人の耳に入ぬやう人知れず亡命をなさしめたるゞ此者今は七助が中お契り両親お代て耕作の業を励ーゞ今計ぞも無三四ゞ七助お伴れーを見て驚くと大方ゝ中ゞ彼等夫婦の為よい

古主と云親の為ハ命の親と其来臨を打喜び尚何までも逗留ありて五ゝと手厚く無三四を饗応し
ゝり然るに此程霖雨ありとゝみれば七助親子四人是をかこつけて弥無三四を止めて放さゞ既に八月十二日其日
午の刻より雷鳴烈しく実に凄ゝき有様なるに無三四之に膳を冷し顔色さへも常とへぬに其中雨歇み雷
鳴も鎮りしゝば無三四ハ漸安堵のやうなるに七助の云るやう貴殿ハ雷を厭ひ玉ふと甚だ是さへ仔細もおもはさ
んと問かけられて然ぐとそ聞玉へ我信濃
路の廣野に於て落雷の為一度肝を冷
せしより以来雷鳴のなる毎に心地宜らぬ
是人智剣撃を以て防ぐべきものにあらざれ
ばなりと答へしかば七助の曰實に然もなるべ
し下地に懲たるとなる時ハ恐るとなるも
のなれ既に此程小倉に於て若壮士と
争の間怖しくハなりしゝと是非なきて

観念いたし居しゝ所へ来りし侍の顔を一
目見るより計ず氣絶致たり実に彼時の
うさまい我も不審く思ひたりしと無三四の言へ
るに七助ゞこれなる長き咄のなれども是迄ハ
秘て妻にも語らざりしに幸両間にて
四個の外に聞者なれば委敷仔細をお咄し
申さん私一旦奉公持をせんと思ひ名島の御
藩中溝口源兵衛と云人の中にありつき律
義に奉公致る中或夜の事主用にて表へ使に出し所向より帰りに
武藝の師匠我主人と深き友達なれば出會ハに木履を脱ぎ礼をなさんと面倒なれ
ども其こらに隠れて遣過さ
んと鳴尾の別荘の裏門脇枳殻垣の中に忍び居しに吉岡どの我隠れたる前に来られ息ふ頃何者にか
ら後より忍び寄只一刀に切付咽元を二刀差貫を時汝ら為に恥辱を受く其怨を思ひ知と呼はり声音の恐

しき心地せり折から雨後の月の晃々たる水に其者の面もはっきりと能見えてうそ然るに此物音を聞付て鳴尾の壮士共裏門を開き出んとする物音に曲者も驚きん東をさして逃出せり己も見付られば面倒あらんと西をさして走り道を換て帰りぬ先日小倉にて争論の時跡より来り仲裁せし侍い豆らん先年吉岡殿を闇討ふせし男なるふそ其夜の事を思ひ出し打驚きしまま氣絶せしと語るを聞き無三四の顔色怒を顕し其吉岡殿といるい太郎右衛門あるやいなふも然り夫とて吾実の父なり吾吉岡が二男にてむつきの中より宮本が養子となりし吾四年以来実父の敵を討んとして困難辛苦然るふ敵ふ出會ふごう討取ざるこそ残念なりいで只今より発足あり小倉ふ至り尋ね出さん渠とそ必今い姓名

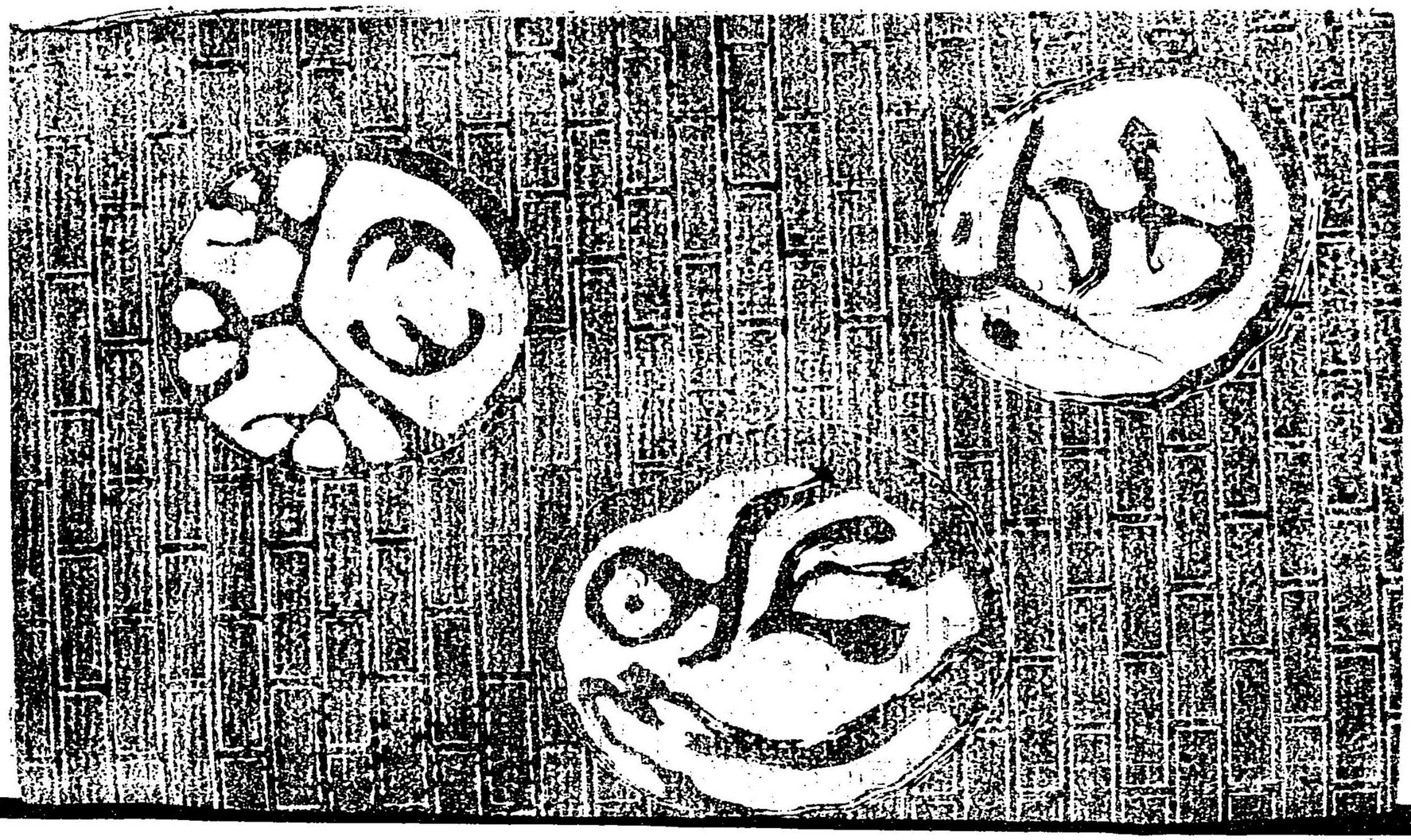
変たふせよ佐々木嵐流といふ者あるべしと既ふ発足の准備ふせば幸助も供ふ随んと頼みしふ助太刀仮の義い無用なれども時ふ取て用のいなんも計難ければとて同行をゆる急ぎ小倉ふ至り探索を尽しいろふ彼者い新参の客分なれて佐々木官太夫とふ剣術の師範あるを今ふ尚其実否を探らんと無三四い幸助を召連れ佐々木の屋敷ふ至り案内を乞ひ官太夫ふ面會ふ及び無三四の云るやう我武術を以て諸国を巡りに未良師を得ず貴殿其道の達人と承りしより比量を試んが為推参せりと謙遜の氣色もあり述べふ佐々木大ふ怒を催し比量の義い承知せり然り真剣の勝負り木刀にていたさるべや無三四の曰夫い貴殿の望ふ任せべし然りば真剣を以て立會べし互ふ若死ふ至るとも異論なるまじとの証書を取代双方保証を出し

約をなまゝ及び無三四ハ佐二木ゑ向ひ貴殿今官太夫と名号るゝ実ハ嵜流どのゝ子なるべゝと云れてうち驚ささやうのことゝゝ云ゑ其包まるゝこと不審なれ拙者の僕ハ播州姫路の者ゑて貴殿をよく見知れり幸伴ひたれバ呼出し対面なるべし尚申べきことゝゝり貴殿嵜流どのゝ子ハ天正十八年四月十五日の夜名島ゑ於て吉岡を暗討せられ覚えなるべしと星を指れて嵜流忽地顔色変りさやうの覚えなしゝとゝハ無三四の曰されハ証人其夜のことを述べしゝハ嵜流今ハ詮方なく遺恨なりて殺せしと云ひ然らんゑハ吾為ニハ貴殿こそ積年覩ふ仇なり吾ハ吉岡太郎右衛門が二男ゑて宮本家の養子となりしゝと実兄ハ父ゑ先たち外ゑ父の仇を報ゆるものなりされバ吾主君清正卿ゑ願ひ武術修行を名として暁ゑ四ケ年漸時節到来して今日父の仇ふる貴殿ゑ面対せり足下も亦前名を以て勝負なるべしと望みしゝハ嵜流案ゑ相違し大ゑ驚きしが固より大膽者なれバ此奴何程の手練ならん只一討ゑ討果さんと胸を撫で言るゝ如く前名を以て死を決べし然らバ此事監察ゑ届置べしとて一通の書面を認め若党ゑ是をもたらし改て無三四ゑ向ひ勝負の地ハ此地海上なる小島ゑ於て決べし是所を駈さぐる為なれバ其准備なるべしと無三四ハ幸助と小舟ゑ乗り又嵜流ハ証人ゑ立し門人二人と共ゑ小舟ゑ乗移り小島をさして漕出ぬ此事さきゑ出せし書面より城主の聞ゑ達せしゝハ家中の門人共心得違ひなどなりて他藩対し不都合なれバ急ぎ警固の備をなすべしと命ぜらゝ是ゑよつて監察の面々多く手の者を召連れ急ぎ小島へ舟を漕出し是より先嵜流ゑ門人共助太刀あさんと各小舟ゑ打乗りゝ小島をさして急ぎける徒る所ゑ無三四嵜流早くも島ゑ著しゝハ無三四ハ船中ゑなる所の櫂をふゝ折二ゑなし左右の手ゑ提げ身ゑハ黒の袷小袖を著し萌黄色の革袴を著せり嵜流ハ白き裃帷子ゑ布袴を高く褰げ白布の帕を手ゝ長光の長刀を挟で船中より飛上りぬ此時しも追々漕付たる船より門人共島へ上らんとするを早も監察の船漕来て制して一人も上陸を許さぬと神妙ゑ見えたりけり然る程ゑ無三四が木刀を以て真剣ゑなたらんとするを嵜流然外怒りちりゝと找きよりいうゑ無三四汝が振舞傍ゑ人なきが如き先我手の中の真剣ゑ當り黄泉ゑ赴くべしと二尺七寸の長刀鞘を放て抜出せバ無三四ハ折櫂を取て間を詰め寄せ真剣ゑなるとる木刀の安排を見よと近よる所ゑ嵜流先を取る透せなりゝん無三四が頭上へ電の如く切りゝるを無三四ハ右の手ゑ携へたる一片の櫂の折を以て受留めたり是より双方秘術を尽し刀去ハ

水刀進ミ時を移して切結ぶ海上の見物へ宛の酒に醉たるが如し嵐流兵を進め飛込しが忽地無三四が両足を薙付たり無三四其劔の上を跳越之大喝一声右手の折櫂を以て嵐流が眉間をもつと打しうバ腦骨砕け血烟立て地へ倒るゝを尚又一打うちまとるゝしゝバ苦しげに叫び其倅息ハ絶果たり実に也天神地祇無三四が孝心を憐ミ玉ひて遂に本意を達したり時に海上の見物数百人無三四が早業の群に起えたるを見て一度にどつと感ずる声暫時ハ鳴りも止ざりけり是より無三四ハ此趣を監察（届け）一夜小倉の旅舎に宿り其朝熊本へかゝりしが養父母共去年世を去りたるを聞き殊の外歎き哀しみ義弟友の助に家名を續べき由云ひ聞せ其身ハ至る所にて住居せんこそ心易しと飄然として再び熊本を立ち出しとあんまと彼無三四が仇を討し一孤島今に世人嵐流島と呼び来り今尚嵐流を埋めし墓石殘きりとぞ実にこの仇討の始りしハ文録二年癸巳八月二十五日の事にてありしとぞ

宮本武三四二刀傳　下の巻終

定價金五錢

NO.2
明治十七年十月廿一日御届
同　十八年三月　出版
編輯兼出版者　岐阜縣平民　春陽堂　和田篤太郎　京橋區南傳馬町一丁目十四番地

岩倉具視公誠忠義傳　全一冊　定價金十七錢
贋葵章　明治天一坊　全二冊　定價二十八錢
粹人秘訣　糸竹の栞　全一冊　定價金四十錢
○狂詩文句　教學便覽　全二冊　定價金五十錢
義太夫本丸生寫朝顔日記　全一冊　定價金三十錢
義太夫本丸菅原傳授手習鑑　定價金三拾錢
義太夫本丸平がな盛衰記　同　金三拾錢
義太夫本丸給本太功記　同　金三拾錢
鬼ケ嶽津島闘取一代鑑　全一冊　定價金十五錢
武田信玄上杉謙信甲越烈戰軍記　全一冊　定價金三圓
尼子十勇士傳　全三冊　定價金六十錢
太平記閑實錄文庫　大坂軍記　全五冊　金一圓十五錢
伊賀越上野櫻の仇討　全二冊　定價金三十錢
鼠小僧白浪草紙　全二冊　定價金三十錢
四谷怪談　全四冊　定價金六十錢
佐賀怪猫奇談　全一冊　十五錢　近刻
白石瞞孝女の仇討　全二冊　定價金三十錢
西國順禮烈女の仇討　全一冊　三十五錢
松前屋五郎兵衛一代記　全二冊　定價金十錢
夢物兵衛胡蝶物語　全一冊　定價金一圓